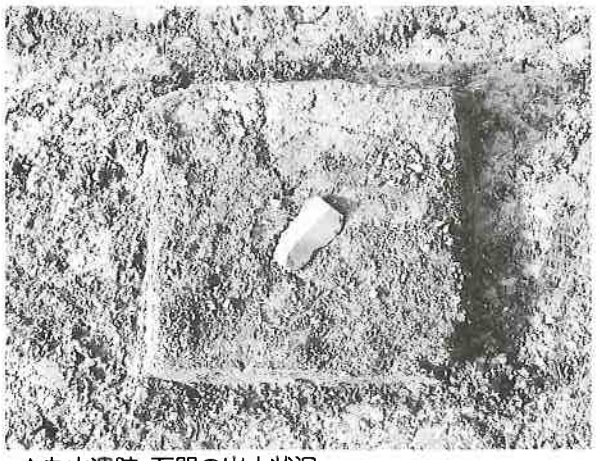
かも
市史だより

平成14年9月
No.6

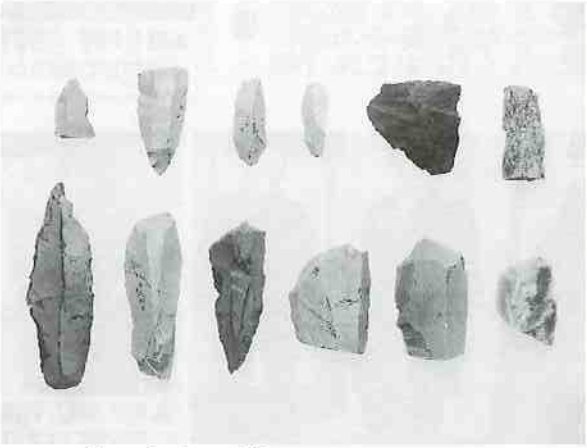
■編集発行　加茂市幸町2丁目3番5号　加茂市教育委員会市史編さん室　☎0256(52)0080　内線480

加茂市最古の住人の生活跡

▲丸山遺跡 発掘調査の様子



▲丸山遺跡 石器の出土状況



▲丸山遺跡 出土の石器

今年の連休（四月二十七日～五月四日）に上大谷に所在する丸山遺跡の発掘調査を行いました。加茂川流域に人類が住みはじめたころの太古の歴史をさぐることを目的としました。

発掘したのは遺跡の一部で、面積は七十四㎡でしたが、約百五十点のさまざまな石器が発見されました。その種類には、ナイフ形石器、彫器、石刃などがありました。ナイフ形石器は、木の棒などの先に付けたヤリに使った狩りの道具です。彫器は、石器の先端を打ち欠き鋭い刃の部分をつくり、万能ナイフのように使ったものと考えられます。

石器のつくり方は、後期旧石器時代の「ナイフ形石器文化」の特徴をよくしめしています。その年代は今から約二万年前にさかのぼります。

出土した石器の点数が少ないことから、短期間住んだ、狩りの途中に立ち寄るキャンプ地の性格が推測されます。これは今のところ市内で発見されている最古の遺跡になります。

今回の調査にあたり市民の皆様から多大なご厚情を賜りました。部会員一同心より厚くお礼申し上げます。

（考古・古民・史部会　小熊博史・立木宏明）

山島地区の伝統料理と昔の着もの

今年の一月、山島新田、川西地区の伝統料理と昔の着ものについて、高齢者グループ「老盛会」の方々が再現くださいましたので紹介します。

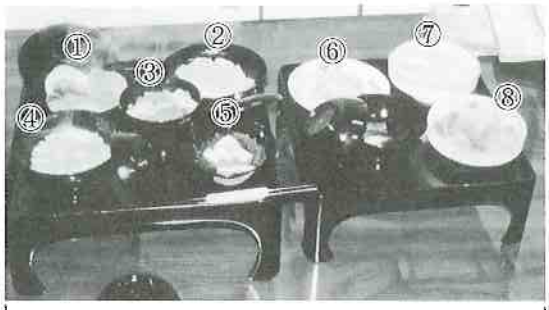
伝統的な精進料理

左の写真はこの地域に伝わる基本的な膳の例です。包丁頭・樋口ツルエさん（八十才）のリーダーシップの下に、前日から準備に入り、三十人分余りの料理を和気あいあいと再現されました。

以前は冠婚葬祭のような一大行事でも親戚や隣近所の手を借りて各家で賄いました。

このようなことは、昭和の初め頃までは一般家庭ではごく当たり前のことでした。特に仏事関係は最近までこの習慣が残っていたようです。

当時は地域の産物や自家生産の材料を用い、季節のものを上手に活かしたものであったから、自然にその地域の料理が定番化し、伝統料理が生まれたものと思われます。



▲精進料理　本膳・二の膳

本　膳　①平　油揚げ・スダレこんにゃく註1・椎茸・里芋・人参　②木皿　白和え　③坪　こんにゃく・人参・いご芋・牛蒡・油揚げ等5種類程度　④飯椀（おやわん）　⑤汁椀　豆腐と青もの

二の膳　⑥皿　キャベツの芥子和え註2　⑦クルミ和え　⑧二の椀　菓子（うちもの）　⑨小鉢（猪口）　のっぺ註3

註1. スダレこんにゃくは仏事に、祝儀には結びこんにゃくを用いた。
2. 芥子は悲しいときの涙を誘うように用いた。
3. この地区では、のっぺの切り方等は祝儀不祝儀で違わない。但し、木皿と坪は祝儀の膳には載せない。また、不祝儀の食器には蓋をする。

学びと楽しみの場

年齢が異なる大勢の共同作業の場では、各々に得意なものがあり、工夫があり、そこには沢山の生活の知恵が集まったものであるといいます。そして料理を作るだけでなく人間関係を知る機会にもなり、「多くを学ぶ場であった」と繰り返された古老の言葉が印象に残りました。大勢が集まってご馳走を作り、食べることはとても楽しいことであったといいます。

▲盛り付け　包丁頭は全般についての段取り、細やかな気配りをし、それに合わせた他の方々の仕事ぶりも見事で、知恵の宝庫を見る思いであった。

昔の着もの

当日は晴れ着や仕事着を始め外出着など沢山持ち寄り、当時を再現してくださいました。その中から一部を写真で紹介します。これら貴重な資料は将来発行される加茂市史民俗資料編にできるだけ多く掲載したいと考えています。

また、このような資料や情報がありましたら、ご協力頂ければ幸いです。

（民俗部会　丸山久子・長井久美子）

▲ヒツ（櫃）親戚の祝儀不祝儀にはオコワなどを入れて届けた

▶（左から）角巻姿・女のヤマ支度・男のヤマ支度

協力してくださった老盛会の皆さん

▶ねんねこ半纏（はんてん）（右）と男児用掛け着物

かも私史

加茂製材の思い出

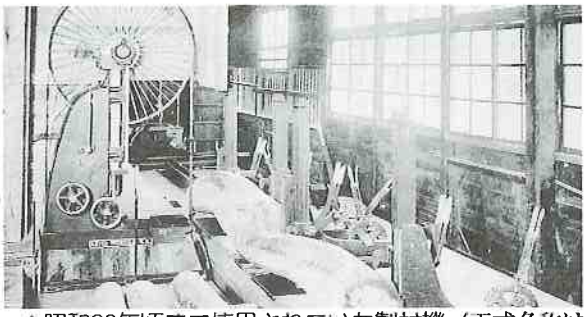
上条 永井レイ

朝昼夕と三回ずつ鳴っていた会社のサイレンは音を消し、昭和二十一年十月にはそれまで使っていた蒸気機関一式も佐渡へ売られ、その年の終わりには新しい電気設備を導入し、戦争による中断から加茂製材の事業は再開しました。それが直後の二十三年一月十二日未明に工場出火で全焼。当時はインフレ真っ只中、増資に次ぐ増資で経営は困難を極めたものです。

昭和三十年代後半に入ると製材量も増え、三十七年には第二工場を増設しました。その後四十二年の小水害を経て、四十四年八月に、今度は大水害に遭ったのです。直径一㍍二〇㌢、長さ四㍍のラワン丸太や米杉丸太までもが水に浮いてしまい置き場所を移動しなくてはなりませんでしたが、これには七月に購入したばかりのフォークリフトが大活躍をしました。

水が引けた直後、事務所へ入って創立当時からの大型金庫の扉を開いた途端どっと水が溢れ出し驚きました。泥水でグッショリと重くなった中の書類や帳簿は一枚ずつ丁寧にはがし、水で洗って干しました。それでもあの嫌な匂いは十年以上もとれず、白壁には一㍍五〇㌢位の所に泥水の跡がクッキリと残りました。この水害で材木運搬に用いられてきた会社のトロッコ線路の命運も尽きてしまいました。

賃挽専門の営業で大径材・長尺材をお客様の注文どおり挽くというので、昭和五十年頃より各地から注文を頂きました。最近では山口県岩国市錦帯橋の架替工事材料の松長尺材を挽きました。これは今



▲昭和20年頃まで使用されていた製材機（正式名称は送材車付帯鋸盤〈おびのこばん〉）

▲現在使用されている製材機

神楽舞保存に尽くして

後須田第一 樋口鷹輝

♪村の鎮守の神様の
今日はめでたいお祭り日♪

幼い頃より口ずさんだ「村まつり」の歌、年齢を重ねるにしたがっていろいろな思い出が浮かぶ村祭り。神社の参道には露店が並び、オモチャや花火、コンニャク売り等は子供たちの足を止めるばかり年六月に一部架替工事が終ったとテレビで放映され、ここにも加茂製材の足跡があるとテレビの画面に見入りました。

でなく、里帰りした児連れの娘達やこれを迎える年老いた人々にとっても幼い頃の郷愁を誘う風物詩でありました。

このように大勢の氏子の皆様方がお詣りするわけですから舞人、楽人達も張り切って神楽を奉納いたしました。

現在後須田の神楽は諏訪神社の氏子及び神楽に理解のある人をもって組織しております。大人六名・小学校四年生二人・稚児四人で、稚児は中学生になると辞めていきます。この稚児のお母さん方も神楽に理解のある人でないとできません。毎日の練習に連れてきてもらわなければならないのです。また舞人、楽人の区別はしておりません。

昨年度小学校の校長先生に「笛を吹く楽人の後継者を見つけてください。」とおすがりしたところ快く引き受けてくださり、現在二人おりますが、笛は難しいです。まず楽譜がありません。耳で聴いて先輩の指を見て覚えるわけです。でも小学校の子供達はよく覚えてくれました。

▲笛を吹く楽人

後須田の神楽の歴史は古く、二百年位前だと聞いております。私どもが先輩より神楽を引き継いだのが昭和二十二年頃だったと思います。当時舞は宵祭で十二舞、大祭で十二舞の計二十四舞奉納しましたが、私どもが覚えているのはこのうち十五舞位しかありません。今では覚えなかったことが残念でなりません。

このように先輩より受け継いだ歴史と伝統を永久に保存し、舞人、楽人の後継者を養成することは住民の郷土愛、また尊い文化財愛護の立場からも大切にしなければならないと思っております。

▲舞をまう稚児たち

探しています

◇ 写真は数少ない昔の狭口村の絵図です。旧狭口村は秋房・桜沢など九つの集落からなる江戸時代では大きな村でしたが、皆無なほど資料がありません。狭口について資料をお知りの方は是非ご連絡ください。

▲旧狭口村絵図（昭和28年の写し）

◇ 江戸時代に加茂で絵を描いていた人々について調べています。何代か前のご先祖様が絵を描いていた、というような謂われをお持ちの方はおられませんか。

▶加茂出身者による絵（栃尾市 和田典男氏所蔵）

◇ 戦後『加茂新聞』という地域新聞が発行されていましたが、明治時代にも同名の新聞があったようで、写真のように附録が現存していることを確認できました。今度はぜひ本紙の記事を見出したいと考えています。見覚えのある方はおられませんか。

▲加茂新聞附録より（明治39年1月1日付）

◇ 自叙伝ブームが喧伝されて久しい昨今ですが、自伝や評伝は近現代史にとっても資料不足を補う格好の材料となっています。お心あたりの向きがおありでしたら、ぜひ御一報ください。

▲加茂ゆかりの方による自叙伝の一例

◇ 昭和三十年頃まで秋房でラジオ製造を行った七欧無線という会社があります。本社倒産後従業員による自主生産がしばらく続いたようですが、この会社についての情報を探しています。

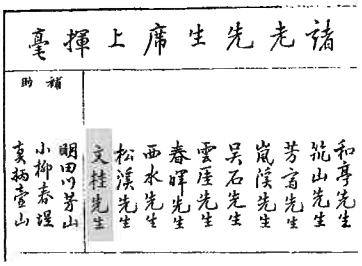
▲加茂町役場発行「1950 加茂の産業」より

◇ 左は約百七十年前の加茂町の商家名です。しかし、何を商売され、何町に住んでおられたか現存の資料では全く不明です。おわかりの方は教えてください。

小国屋半左衛門
小国屋要吉
藤屋甚右衛門
桂屋平次郎
桂屋十次兵衛
若狭屋喜助
三浦屋六郎次
川船屋庄吉
仕立屋伊左衛門
宮路屋清右衛門
村山屋庄八
村山屋与太郎
古金屋甚五兵衛
越中屋八郎右衛門
三川屋喜左衛門

▲加茂市立図書館所蔵 天保3年（1832）町場資料より作成

◇ 写真は、恐らく幕末に加茂周辺の書家や画家が集まって開かれた会の名簿ですが、このうち「文桂先生」とある人物について知りたいと望んでいます。ご存知の方はおられませんか。



臺輝上席生先光諸

時補

明田川芳山
小柳春堤
夏柄雪山

文桂先生

松渓先生
西水先生
春暉先生
雲厓先生
吳石先生
嵐渓先生
芳富先生
苑山先生
和亭先生

▲「文桂先生」とある文書（山崎徳左家所蔵）

◇ 戦時中加茂に日本滑空機工業という木工会社ができ、多数の女子学生が学徒動員で働いたとされていますが、何がどう生産されていたのかよくわかっていません。そこで働いた経験をお持ちの方はおられませんか。

県内女子学徒動員状況
（1944年9月15日現在）

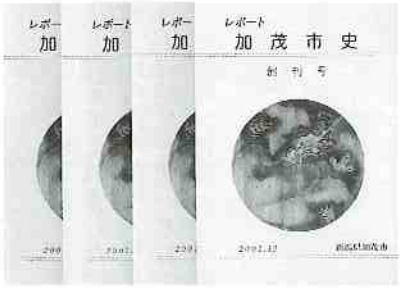
〈高等女学校〉	
村上	村上飛行機など4カ所200人
新発田	新潟鉄工など2カ所150人
新潟	陸軍被服本廠800人
市立新潟	陸軍被服本廠300人
新津	新潟鉄工など3カ所200人
巻	新潟鉄工など2カ所100人
白根	理研電気無線白根50人
村松	日本蚕糸村松工場50人
加茂	日本滑空100人
三条	三条航空など5カ所300人

▶学徒動員について報ずる記事より（「新潟日報」平成十四年八月八日付）

編集後記

市史編さんも三年半を経て、来たるべき資料編刊行を睨みつつ作業を進めています。

郷土の諸先輩が残された資料を閲覧する機会がままありますが、地道に積み重ねられたこれらの財産をいかに咀嚼するかが大切だと痛感します。何気ない一行、一節から窺える情報に目を凝らして作業を進めたいと考えています。



「レポート加茂市史」創刊号

市役所各機関にて好評発売中

★1冊1,000円★